

The Gallery voice

NO-35

編集・発行／画廊沖縄〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2008.09.13

Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

漂う。漂う。ふわり、漂う。

桃原須賀子

手を伸ばしても、それは捕まらない。指と指の透き間をひんやりとすり抜けて、ふわり、漂う。ひんやりが残ったこの指を“ぎゅっ”と強く握り締めると“ぐにゃっ”と音がした。

くるくる、ぐるぐる、目が回る。季節は止まることなど知らず廻り廻り、後ろを振り返っても、後ろは遠くて見えないし、速すぎて探せない。私の時間も世の中の時計も慌ただしく過ぎていく。私の思考は体に置いていかれ、体を見失った思考は行き場を求めて時の波を漂う。そう。ふわり、漂う。

小さな頃から物語の中に入り込むことが好きな子供でした。今でも“その世界”は脳裏から消えることはなく、瞼を閉じるとすぐに浮かんできます。家の裏には山があり、モクマオウの林が広がり、いつも、そこで一人で遊んでいました。モクマオウが風に吹かれ、青空を揺らし、光の雨が降り注ぐ木漏れ日の中、木々のざわめきが私の体を包み込み、空高く、ふわりと浮遊する感覚に幾度もなったものです。耳を澄ますと、木々や風の音が聞こえてくるようで、だから、一人でも怖くありませんでした。むしろ、守られているという安心感に満ち、温かかったものです。そこは秘密漂う空想の空間だったのでしょう。自然に接する環境は感性を刺激し、絵を描くことの要因をすこしずつ形成していったのでしょうか。

絵を描き始めると、“そっちの世界”に深く引き込まれ、眠っていた感覚が覚醒します。“そっちの世界”は未知なる迷宮のように奥深く、刺激的で甘美な蜜を懐に忍ばせて待ち受けています。密をほおぼり、深遠の淵に追い込まれると、“こっちの世界”に“もう、戻らなくてもいいかな”と思ってしまうのです。でも、帰らなければなりません。頑張るのです。帰れると、家族の存在に感謝し、ホッとします。人は一人では生きていないものです。誰かに支えられて生かされているものです。私は、家族が私を見つけてくれることを確信し、安心して“そっちの世界”と“こっちの世界”を行き来できるのでしょう。

私は、制作中によく泣きます。泣きながら描きます。言葉にならない感情にもみくちやにされてポロポロ泣きながら描いています。そんな感じなので“つるのおんがえし”のごとく“見てはなりませぬ”“戸を開けてはなりませぬ”と制作中はア

トリエ入室禁止令を発令するのです。泣いたり、笑ったり忙しいです。

作品に説明は必要でしょうか。言葉による主義主張は必要でしょうか。絵を描き始めた時から自問自答しています。根本的解釈は異なりますが、ジョン・ケージの言葉に“私はなにもいうことはない。だから、そのことをいう”とありますが、私には“だから、そのことをいう”こともできず、口を噤んでしまいます。答は遠いです。



「浮遊 - II」アクリル・キャンバス / 90 × 90 cm

絵画の終焉が繰り返し叫ばれてきた中、古典的に画面に向き合い描いてきました。描くことは、可視なるものはもちろんのこと、目に見えない精神や心理を含んだ不可視なるものの可視性を可能化する追求なのでしょう。可視性と不可視性との境界の融合を模索し、自己消去していく。画面にその痕跡を残し、表現としていく。時の流れの中、思想や理念は微妙に変化し、概念に解き放たれた思考は常に揺れ動きます。確かなものなど何もないのでしょうか。

悲しいとき、つらい時、空を見上げます。どうしてなのか、なにげない行為なので考えたこともなく、気がつきませんでした。悲しさにうなだれた険しい顔は、空を見上げることで、すこし笑ったような顔になるそうです。人は、どんなに悲しい時でも無意識に前を向いて歩いて行ける生き物なのでしょうね。今日も、私は、この果てしなく大きな空を、ちょっと微笑んで見上げています。

(美術家 / とうばる すがこ)

桃原須賀子展によせて

金城 馨

「助走-I」

この原稿を依頼されたとき、ある質問を桃原に投げかけた。制作に取りかかるまでの間の、充電期間ともいうべき時期に、何をしているのか。すると、彼女はいくつかのエピソードを話してくれた。

時々、空を仰ぎ、突き抜けるような青の一部に、色を置いている、と彼女は語った。空の上に透き通ったスクリーンを重ね、その上に思いついた色をのせては、指でこすってぼかし、空の色と馴染ませる。次にもう一色おいては空に馴染ませる。

空を覆う一枚の透明な絵画が誕生するまで、こうした空想の手作業を納得がいくまで続けているのだという。

「助走-II」

彼女は、車を走らせている時でさえ、道路わきの植栽、雑木林、道端の草花などの植物のもつ美しさに、目を奪われるのだという。「危ないドライバーよ。」彼女は笑いながらそう言った。植物に目がとまると、彼女はその枝や茎、蔓を眼で辿る。「成長」とは、枝や蔓の強度、弾性と重力とのバランスによって彫刻された「時間」なのだと思う。「こう伸びて、ここで折れて、次はこの向きに・・・」彼女は枝や葉の形に内包されている、楽譜のような連続性と法則性を見ている。しかし、生命はいつも、観察者を裏切る瞬間を準備している。予測はいつも裏切られる、と彼女は言う。突拍子もない方向へ枝が伸びている。しかしそれでも、絶妙のバランスと美しさは、損なわれることがない。この自然の持つ厳格さと柔軟さに、つい見とれてしまうのだという。

「アトリエ」

描きかけの絵を見せてもらった。濃淡のある白い地の上に、弓状の線が下から上、あるいは、上から下へくり返し描かれている。白からグレーへの濃淡に重なる線を眺めていると、壁に掛けられた白い布の襞や、霧の合間から茫洋と浮かび上がった水面のさざ波が見えてくる、と感想を言おうと、これらの作品は未完成で、さらに手が加えられるのだ、と桃原は言った。どうしても、どこかで見た光景を再現しようとして筆が走ってしまう。それを制止し正しい方向を探そうとしているようだ。

桃原は、葉脈の流れや雲の陰影などを、目に見えているように再現するかわりに、現実の世界からすれば未完に見える、限られた要素だけでできた宇宙を作り上げようとしている。それは大木をノミで削り、仏像を彫りだすような、引き算の行為だ。彼女が繰り返し描き続けてきたのは、線の可能性とあってよい。それは、痕跡や残像に

も似ている、子どもの頃、花火を持つ手を素早く動かして、目に焼き付けた光の落書きのような。ただし彼女が描こうとしている線は、あてもなく動かした手の痕跡ではない。速度と方向に必然を宿した行為だ。そして、そこから彼女の内面的世界と共振し、重力や制約に抗い、上昇と下降を繰り返しながら浮遊する形を生み出そうとしている。

桃原はきっと、自ら描く線が彼女の手元から離れ、独立したものとして生まれ変わる瞬間を目指している。その瞬間に近づくために、描いては白で覆い、また描くということを忍耐強く続けているのだ。



「浮遊-I」アクリル・キャンバス／90×90cm

「ラスコー、永遠の現在へ」

今から1万6千年前、クロマニヨン人によって描かれたラスコーの洞窟画には、躍動する動物の一瞬の動きを定着させたような凶像と並んで、人の手形がある。それは、洞窟画のアーティストの一人が、濡れた洞窟の岩肌の手ひらを押し当て、その輪郭に沿って口に含んだ黒の顔料を吹きかけることによってできたものだ。

その行為は、ひょっとすると「野牛描きの〇〇」という署名のようなものであったかもしれない。吹きかけられた黒色は、手の輪郭を縁取っているが、手そのものを描いてはいない。にもかかわらず、黒で縁取られた空白である岩肌や、背景の黒からは「野牛描きの〇〇」の気配が放たれている。

桃原の作品は、現在の彼女が表しうるものの到達点と限界であり、どうしても通らなければならなかった道に残した轍だ。彼女の「現在」が封印された画面を思い浮かべると、ラスコーの洞窟に残された手形が重なった。

(美術教師／きんじょう かおる)

ふつつと発酵

栄 さゆり

空を見る。ただ空を眺めるだけのために。移りゆく雲、刻々と変化していく色彩に、見とれていると、時が止まったよう。

そんな時間を持つことが、主婦になり母になると少なくなってしまう。彼女は、私にとって、空を眺める話が、いつでも出来る唯一の友人。私達のお喋りは少し可笑しい。家事の話題。洗濯物を干すのに、グラデーションに並べ、配色を考え位置替えしたりと大変!らしい。フツの主婦なら、いかに乾きやすく干すかが、研究課題なのに…。

初めて須賀子さんに会ったのは、高校生の時。いつも絵を描く事に夢中で、フワんと地面から浮いている感じの、華奢な女の子だった。しっかりと形のとれるデッサン、豊かな中間色の美しい油絵をみた時、美術を学びたいとぼんやり考えていた私は、(絵を描いていくのは、こんな人だ。自分は違う方向を探そう)と思った事を鮮明におぼえている。

時が経ち、偶然会った私達は、子に恵まれていた。彼女は、スクッと大地に立つ、優しいお母さんになっていた。

子をもつと、大切なものの大きさに気がつく。無我夢中で守り、慈しみ、育てる。一生懸命に育児に向きあう。自分の表現のための時間は、遠くにいつてしまう。けれど消えてしまったのではなく、作家の頭の中で静かに暖められる。身体の内側で、ふつつと発酵させていく。描く事への情熱を。

そしてやっと表現できる時が来る。母親業と、せわしない家事をこなしながらの制作。短い、切れぎれの時間を繋ぐ様にして、表現の世界に深く入り込んでいく。時には、表現したいものが強くあるのに、手を通しておいてこない。圧のかかった苦しい時間がある。やがてふとした瞬間に、キラキラと作家の体から溢れだし、空気を掴み、線になり、色になる。ここからは、全神経を研ぎ澄ます、濃密な時間。凄い集中力で沸点まで登りつめる。

「ただいまー」という可愛い声に、フツ

ーとモードを切り替えていく。

“今日の制作はもうおしまい。又、明日!”と彼女の呟く声が、聞こえてきそう。そして日常の生活に戻っていく。

表現のあちら側の世界と、日常のこちら側の世界を、行き来する。それを軽やかに往復する術を、彼女は手に入れた。その二つの世界の振り幅が大きい程、両方がますます輝き出すのではないだろうか。圧縮された時間の中で、冴え渡った感覚は、しなやかに作家の手を動かす。

彼女が制作に没頭出来る大きな要因に、ご主人の理解がある。「絵を描くのが、あなたの仕事でしょ」という言葉を、もらったという。強力なサポートを得て、家族に守られて制作していく。



アトリエにて 2008年8月

彼女が母になっていて本当に良かった。と友人として思う。表現の世界に入り込んだまま、あちら側から戻ってこれるか心配だったもの。

彼女の作品世界から、私はなんとも心地良い、幸福感を感じる。爽やかで澄んだ空気に満ち溢れる。優しいだけではないシャープでしなやかな線。独自のグルーブ感(彼女の声にも似た、人を惹きつける波長を持つ)が空間で響きあう。

作品を見ていると、“生きていることは、なんて楽しいことなんだろう。と素直に思えてしまう。生まれたての赤んぼのように、今、在ることのシアワセが、画面から漂ってくる。そして音が、聞こえてくる。

(テキスト作家/さかえ さゆり)



2008年9月画廊にて

桃原須賀子について

桃原須賀子は大学を卒業して間もなく二人展（金城馨と）を開いている。創作活動は旺盛で87年には初個展を開いた。ドリップ（絵の具を画面上にたらして描く）の爽やかなアクション画面は上品な女性らしい感性に溢れ、期待の新進作家の登場を予感させた。発表した「SQUARE」シリーズは、平面絵画でクールな立方体の空洞を描き、その形而上学的な幻想の空間に、鮮やかな色彩が乱舞するシュールな風景であった。

当時の沖縄美術界は「沖縄らしさ」に記号化された言葉に象徴されるように、歴史文化や風土色の濃い内容作品が多く見受けられた。また、日本のバブル経済の絶頂期でもあり、世はエスニックとアジアブーム、バスキア以降のニューペインティングの渦中であつた。そのような潮流の中にあつて、桃原は時代に逆行するかのように、風土や歴史性など場と土着的なモノをそぎ落とし、全くピュアーな造形と感性の世界を展開して見せた。沖縄美術界に新鮮な風を送り込んだ個展の瞬間だったと言えよう。

89年の第二回個展は前回の形而上学的空間から離れ、鮮やかに乱舞するアクションペインティングのドリップの手法部分だけが透明アクリル板上に描かれた。描かれた二枚のアクリル画面を重ねた異色の実

験的な絵画が提示された。この新たなイリュージョンの獲得と表出は、今後の桃原の展開がどのように発展するのか大きな期待が寄せられた。

しかし、多忙な職場、結婚、主婦業、子育て、至極当たり前の一女性作家の足どりは、日常からキャンバスに向かう時間が奪われ、仕事と家事に専念しなければならなかった。制作活動が停止していた桃原に、しばしば展示会場で出会うことがあつた。「どう制作は？」と声をかけると、「まあなんとか、。」と多くは語らなかった。

40代に入り子育ても一段落したのだろうか、満を持したかのように創作モードのスイッチが入った。制作環境が整い活動を再開、2002年からほぼ毎年個展を開いて活躍中である。

かつて、ピンクやブルー、グリーンの鮮やかな色彩が乱舞する、桃原の画面があつた。しかし、制作休止十数年を経た現在、あの鮮やかな色彩とドリップが消え、寡黙で温かさを帯びた奥行き深い描写画面へと展開した。モノトーンの静謐な画面は、「不在」から「在」へ挑む情熱と精神性をたたえている。休止中、キャンバスには向かえなかった状況は、桃原の思索が自己の内面世界と対峙した日々ではなかったかと想像される。未踏の地平へ踏み込んだのだろうか、自由に伸びやか、繊細な線が浮遊する魅力的な画面に出会った。

（画廊沖縄代表／上原誠勇）

■ 桃原須賀子プロフィール ■

- 1960 那覇市生まれ
- 1984 玉川大学文学部芸術学科美術専攻油絵科卒業
- 1985 2人展 県民アートギャラリー
- 1987 個展「スクエア・ボックス・ウインドウ」画廊沖縄
- 1989 個展「まぶしい真夏のシャワー」画廊沖縄
- 2002 個展 前島アートセンター
- 2003 個展 D's ギャラリー
- 2004 個展 「線のむこう」リウボウホール
- 2005 10人展「今いる風景」ギャラリーアトス
- 2006 個展「払拭」ギャラリーアトス/ think of
- 2008 個展「浮遊」画廊沖縄